高　等　学　校

平成２６年度

教育研究員研究報告書

公　　民

東京都教育委員会

目　次

Ⅰ　研究主題の設定理由・・・・・・・・・・・・・・・・ 1

Ⅱ　研究の視点・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 2

Ⅲ　研究の仮説・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

Ⅳ　研究の方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 3

Ⅴ　研究の内容・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 4

Ⅵ　研究の成果・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

Ⅶ　今後の課題・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 24

研究主題	社会的事象を多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を育むための指導と評価

Ⅰ　研究主題の設定理由

我が国は現在、社会構造の変革期を迎えている。「知識基盤社会」の到来やグローバル化の進展の中で、アイディアなど知識そのものや人材をめぐる国際競争が加速するとともに、異なる文化・文明との共存や国際協力の必要性が増大している。このように大きく変動する社会において、確かな学力、豊かな心、健やかな体の調和を図り、「生きる力」を育むことがますます重要になっている。

こうした社会的背景を踏まえ､平成 25 年度入学生から全面実施となった高等学校学習指導要領では、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、思考力・判断力・表現力等を育成することの重要性が指摘され、各教科等において言語活動の一層の充実を図ることが示された。

公民科においても、よりよい社会の形成に自ら参画していく資質や能力を育成するため、各科目の専門的な知識、概念や理論及び倫理的な諸価値や先哲の考え方などについて理解させるとともに、それらを手掛かりに各科目の特質に応じて取り上げた諸課題を考察させ、社会的事象に対する客観的で公正な見方や考え方と、人間としての在り方生き方についての自覚を一層深めることを重視するとの方針が示されている。

このような点を踏まえ、公民部会では一昨年度、「指導と評価の一体化」を主題として研究を行い、言語活動を取り入れた授業の各段階において適切な評価規準を設定し、それを到達目標として生徒に明示した上で指導と評価の一体化を図ることが、思考力・判断力・表現力等を向上させる上で効果的であることを明らかにした。また、昨年度の研究では、「段階的な評価規準」を活用した授業実践や、単元ごとの学習評価を定型的に実施するなどの取組を行うことで、思考力・判断力・表現力等の向上や、生徒の学習意欲の向上を促進できることを明らかにした。

これらの先行研究を踏まえつつ、今年度の本部会では、公民科として育成すべき思考力・判断力・表現力等についての検討を行った。現代社会においては、グローバル化や高度情報化の進展に伴う諸課題、環境問題、資源・エネルギー問題など、地球規模で対応しなければならない課題が山積しており、異なる文化・文明との対話を通じて合意形成を図ることの重要性が高まっている。対話による合意形成を実現するには、異なる意見や考えに配慮しながら物事を深く考察することや、問題の背景にある事実関係や判断の根拠となる推論等を踏まえた上で、自己の意見を適切に表現することが必要である。その前提として求められるのが、社会的事象を様々な側面・角度から考察し、社会全体の幸福に配慮して公正に判断する力である。

このような考察を踏まえ、私たちは、生徒の思考力・判断力・表現力等を育む上で、社会的事象を多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を養うことこそが、公民科に求められる最も重要な視点であるとの共通認識をもつに至った。

以上の理由により、今年度の本部会では、研究主題を「社会的事象を多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を育むための指導と評価」とした。

Ⅱ　研究の視点

本研究では、公民科として生徒の思考力・判断力・表現力等を育成する上で、次の二つの視点を重視しながら研究を進めた。

一つは、「社会的事象を多面的・多角的に考察する力を育むには、どのような指導と評価が必要なのか」という視点である。

現代の複雑化する社会においては、社会的事象を一面的に見るだけではその本質を捉えることが困難になっており、様々な価値観の存在を踏まえた上で多面的・多角的に考察することがますます重要になってきている。学習指導要領においても、公民科の教科目標は次のように示されている。

> 広い視野に立って、現代の社会について主体的に考察させ、理解を深めさせるとともに、人間としての在り方生き方についての自覚を育て、平和で民主的な国家・社会の有為な形成者として必要な公民としての資質を養う。（『高等学校学習指導要領解説　公民編』）

ここに言う「広い視野に立って」という部分は、①中学校社会科の学習成果を踏まえ、②多面的・多角的に考察しようとする態度と公正で客観的な見方や考え方を育てること、③国際的な視野を育てること、を意味している。

この点に立ち返ったとき、社会的事象を多面的・多角的に考察させるにはどのような方法が考えられるか、という課題が浮かび上がってくる。そこで本研究では、現代社会の諸課題を探究させる際に、いくつかの論点・争点をワークシート等に盛り込み、様々な側面から考察させる言語活動を実施した。また、教員による評価だけでなく、生徒の自己評価、生徒相互の相互評価を取り入れることで、多面的・多角的に考察する力を身に付けさせようと考えた。

もう一つは、「社会全体の幸福に配慮した公正な判断力を育むには、どのような指導と評価が有効なのか」という視点である。

前述したように、異なる文化・文明との共存や国際協力の必要性が増大する中で、公正で客観的な見方や考え方に立つことは極めて重要である。学習指導要領においても、例えば『現代社会』の内容として、次のように明記されている。

> 現代社会における諸課題を扱う中で、社会の在り方を考察する基盤として、幸福、正義、公正などについて理解させるとともに、現代社会に対する関心を高め、いかに生きるかを主体的に考察することの大切さを自覚させる。（『高等学校学習指導要領解説　公民編』）

ここで示されている「公正」とは、対立や衝突を調整したり解決策を考察したりする過程において、また、その結果の内容において、個々人が対等な社会の構成員として適切な配慮を受けていることである。

こうした点に留意し、本研究の授業実践では「対立や衝突の調整を図る際に、当事者のうち片方の主張だけを取り上げていないか」といった視点や、「少数者にも配慮しながら社会の多数の幸福を図るようにしているか」といった視点を評価規準に反映させた。また、ワークシートや ICT 等を活用して、その評価規準をあらかじめ生徒に明示することで、公正で客観的なものの見方や考え方に対する意識付けを図ろうと考えた。

Ⅲ　研究の仮説

本研究では、次の二つの仮説を立てて検証授業を実施し、その結果について分析した。

1　社会的事象を深く探究させる場面を設け、様々な論点・争点について言語活動を行わせるとともに多様な評価を行うことで、多面的・多角的に考察する力を育むことができる。

今年度の仮説を設定するに際して、まず、昨年度の本部会において課題とされた「どのような言語活動を実施し、どのような教材や課題を選定するのか」という点に留意し、多面的・多角的に考察する力を育むための言語活動や教材について検討を重ねた。その結果、生徒自身の考え方を表明させるだけでなく、様々な論点や争点について言語活動を行わせるとともに、学習評価について、教員による評価、生徒の自己評価、生徒同士の相互評価を組み合わせることで、多面的・多角的な考察を促すことができるのではないかと考えた。

2　社会的な望ましさという視点を反映した評価規準を設定し、あらかじめ生徒に明示した上で言語活動を行わせることで、社会全体の幸福に配慮した公正な判断力を育むことができる。

昨年度の本部会の研究では、あらかじめ生徒に「段階的な評価規準」を明示し、教員と生徒による評価規準の共有化を図ることで、思考力・判断力・表現力等の向上や、生徒の学習意欲の向上を促進できることを明らかにした。今年度の研究においてもその成果を踏襲し、あらかじめ評価規準を生徒に明示することにした。それに加え、評価規準を設定する際に、社会の在り方を考察するための基盤として「幸福、正義、公正」などを踏まえた、社会的な望ましさという視点を反映させることで、現代社会の諸課題について公正に判断する力を育むことができるのではないかと考えた。

Ⅳ　研究の方法

Ⅲで示した二つの仮説に基づき、指導及び評価・検証に際しては、次のような具体的方策を採用することとした。

まず、社会的事象を多面的・多角的に考察する力を育むための方策として、ワークシート等を作成する際に、テーマとする社会的事象について様々な論点・争点を教員が用意し、段階を踏んで徐々に論点を加えていく形で言語活動を行わせた。また、評価方法についても、言語活動の成果を教員が評価するだけでなく、生徒自身の自己評価や生徒同士で行う相互評価を実施した。教員が、言語活動の様子を注意深く観察したり、ワークシートや評価シートを分析したりすることで、多面的・多角的に考察する力が育まれたかどうかを検証した。

次に、社会全体の幸福に配慮した公正な判断力を育むための方策として、評価規準に「対立や衝突の調整を図る際に、当事者のうち片方の主張だけを取り上げていないか」といった視点や、「少数者にも配慮しながら社会の多数の幸福を図るようにしているか」といった視点を反映させた。また、ワークシートや ICT 等を活用し、その評価規準を生徒に明示した上で言語活動を行わせた。こうした言語活動を観察したり、ワークシート等を分析したりすることで、社会全体の幸福に配慮した公正な判断力が育まれたかどうかを検証した。

Ⅴ　研究の内容

１　研究構想図

全体テーマ　　**思考力・判断力・表現力等を高めるための授業改善**

高校部会テーマ　　**思考力・判断力・表現力等を育むための指導と評価**

現状と課題

思考力・判断力・表現力等を育むために、各学校において討論や発表などの言語活動を取り入れた指導が少しずつ行われるようになっている。また、それを適切に評価することの重要性も認識されつつある。

これからの社会においては、異なる文化・文明との対話を通じて合意形成を図る力が必要不可欠である。対話による合意形成を実現するには、異なる意見や考えに配慮しながら物事を深く考察することや、問題の背景にある事実関係や判断の根拠となる推論等を踏まえた上で、自己の意見を適切に表現することが必要である。こうした社会的要請を受け、公民科においては、現代社会における諸課題を多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を育むための指導及び評価を一層充実させていくことが喫緊の課題となっている。

公民部会主題

社会的事象を多面的・多角的に考察し、公正に判断する力を育むための指導と評価

仮説

１　社会的事象を深く探求させる場面を設け、様々な論点・争点について言語活動を行わせるとともに多様な評価を行うことで、多面的・多角的に考察する力を育むことができる。

２　社会的な望ましさという視点を反映した評価規準を設定し、あらかじめ生徒に明示した上で言語活動を行わせることで、社会全体の幸福に配慮した公正な判断力を育むことができる。

具体的方策

１　ワークシート等を工夫し、様々な論点を明示しながら言語活動を行わせることで、現代の諸課題を様々な側面から考察させる。また、教員による評価に加え、生徒の自己評価、生徒同士の相互評価を取り入れることで、様々な角度から物事を捉えることの重要性に気付かせる。

２　評価規準を設定する際に、社会的に望ましい解決策を考察しているかどうかという視点を反映させる。また、ワークシートや ICT 等を活用し、その評価規準を生徒に明示した上で言語活動を行わせることで、社会全体の幸福に配慮した解決策を公正に判断させる。

評価・検証

言語活動への取組を観察するとともに、教員による評価、生徒の自己評価、生徒同士の相互評価を取り入れたワークシート等の記述内容を分析することで、社会的事象を多面的・多角的に考察し、社会全体の幸福に配慮した公正な判断力を育むことができたかどうかを検証する。

２　実践事例Ⅰ

科目名	現代社会	学年	第３学年

(1) 単元名、使用教材

・　単元名　　(2) 現代社会の人間としての在り方生き方
　　エ　現代の経済社会と経済活動の在り方

・　使用教材　『新版　現代社会』（実教出版）

(2) 単元の指導目標

・　企業の経済活動に対する関心を高め、企業の社会的役割と責任について意欲的に探究させ、自己の生き方と関連させながら考察させる。

・　企業の経済活動について多面的・多角的に考察させ、社会の変化や様々な立場、考え方を踏まえて公正に判断させ、その過程や結果を適切に表現させる。

・　企業の経済活動に関する諸資料を様々なメディアを通して収集させ、学習に役立つ情報を適切に選択して、効果的に活用させる。

・　企業の目的と役割、株式会社の仕組み、株式市場の役割、直接金融と間接金融などについて理解させ、その知識を身に付けさせる。

(3) 単元の評価規準

ア　関心・意欲・態度	イ　思考・判断・表現	ウ　資料活用の技能	エ　知識・理解
企業の経済活動に対する関心を高め、その役割と責任を意欲的に探究し、自己の生き方と関連させながら考察しようとしている。	企業の経済活動について多面的・多角的に考察し、社会の変化や様々な立場、考え方を踏まえて公正に判断し、その過程や結果を適切に表現している。	企業の経済活動に関する諸資料を様々なメディアを通して収集し、学習に役立つ情報を適切に選択して、効果的に活用している。	企業の目的と役割、株式会社の仕組み、株式市場の役割、直接金融と間接金融などについて理解し、その知識を身に付けている。

(4) 単元の指導と評価の計画（７時間扱い）

次程	ねらい・学習活動等	評価の観点 関	思	技	知	評価規準（評価方法）
第一次（２時間扱い）	【ねらい】企業の経済活動に対する関心を高めさせるとともに、企業の目的と役割、株式会社の仕組み、株式市場の役割などについて理解させ、その知識を身に付けさせる。					
	○東京五輪開催決定のニュースや長者番付の資料などを通して、株価の値動きや起業家の経営理念に関心をもつ。	●				○株式市場の動きや企業の経営理念に対する関心が高まっている。（観察）
	○DVD 教材を通して、企業の目的と役割、株式会社の仕組みなどについて理解し、ワークシートに記入する。				●	○企業の目的と役割、株式会社の仕組み、株式市場の役割などについて理解し、その知識を身に付けている。（ワークシート・考査）
第二次（３時間扱い）	【ねらい】様々なメディアを活用して情報を収集させるとともに、グループワークを通して社会的に望ましい企業の在り方について意欲的に探究させ、様々な観点から多面的・多角的に考察させる。					
	○ALT のプレゼンテーションや、ICT 等を活用した情報収集に基づき、新たなビジネスプランを企画する。			●		○企業のホームページなどを参照して学習に役立つ情報を収集し、効果的に活用している。（観察・ワークシート）
	○東京五輪で日本を訪れる外国人にとって魅力のあるビジネスプランについて、グループで意見を出し合う。	●				○グループワークを通して、社会的に望ましい企業の在り方について意欲的に探究している。（観察）

	○企業理念、ターゲット、商品企画、価格、広告、CSR などついて意見を出し合い、グループとしてのアイディアをまとめてワークシートに記入する。		●			○企業理念、ターゲット、商品企画、価格、広告、CSR などの観点から、企業の経済活動を多面的・多角的に考察している。（ワークシート）
第三次（２時間扱い）（本時）	【ねらい】新たなビジネスプランを適切に表現させるとともに、社会的に望ましい企業の在り方について様々な立場や考え方を踏まえて公正に判断させ、自己の生き方と関連させながら考察させる。					
	○プレゼンテーションシートを活用して、グループごとに企画したビジネスプランを発表する。 ○他のグループの発表を聞いて、様々な観点から評価し、その結果をワークシートに記入する。 ○単元の学習内容を振り返り、自分の取組や理解度について、ワークシートに記入する。	●	● ●			○新たなビジネスプランの企画について、様々観点から多面的・多角的に考察し、その過程や結果を適切に表現している。（発表） ○社会的に望ましい企業の在り方について、社会の変化や様々な立場、考え方を踏まえて公正に判断し、その過程や結果を適切に表現している。（ワークシート・発言） ○社会的に望ましい企業の在り方について、自己の生き方と関連させながら考察しようとしている。（ワークシート）

(5) 本時（全７時間中の６時間目）

ア　本時の目標

・　「新たなビジネスプランを企画する」という課題に対する関心を高め、社会的に望ましい企業の在り方を意欲的に探究させ、自己の生き方と関連させながら考察させる。

・　新たなビジネスプランついて、様々な観点から多面的・多角的に考察させ、社会の変化や様々な立場、考え方を踏まえて公正に判断させるとともに、その過程や結果を様々な方法で適切に表現させる。

イ　本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
導入	１０分	○グループに分かれ、発表のリハーサルを行う。 ○くじ引きを行い、発表の順番を決める。	○発表原稿の棒読みにならないよう注意を促す。 ○くじ引きによってゲームの要素を盛り込み、学習意欲を高める。	ア　観察 ア　観察
展開	３５分	○くじ引きで決まった順番で各グループが発表する（１グループにつき約５分）。 ○他の生徒は、発表を聞きながら評価シートを記入する。 ○１グループの発表が終わるごとに質疑応答を行う。	○各グループの発表の開始後、３分が経った時点で「残り２分」のボードを見せるようにし、時間配分に注意を促す。 ○評価シートへの記入状況を確認しながら、グループの交替、プレゼンテーションシートの掲示などを速やかに行うよう注意を促す。 ○質疑が出ない場合は、教員が複数の生徒を指名する。	イ　発表 イ　ワークシート イ　発言
まとめ	５分	○評価シートの記述内容を振り返り、どのグループの発表内容に魅力を感じたのかを検討する。	○本時の発表内容について講評し、次回の発表につなげる。	ア　観察

ウ　指導と評価の詳細

本事例では、「東京五輪で日本を訪れる外国人にとって魅力のある、新たなビジネスプランを企画する」という課題に取り組ませた。ここでは、本時を含む、単元の第二次及び第三次における指導と評価の詳細について述べることにする。

まず、第二次の冒頭で、JET プログラムで来日中の英語等指導助手の協力を得て、日本での生活で「不便だと感じる点」や「便利だと感じる点」について、英語で簡単なプレゼンテーションを行ってもらった。それを踏まえて、日本を訪れる外国人のニーズに応えられるようなビジネスプランを生徒に企画させ、隣の生徒同士で説明と評価を行わせた。その際、投資という視点も踏まえながら、分析力・独創性・社会貢献度等に関する評価規準を示し、今後のグループワークではそれらの規準を考慮してビジネスプランを企画するよう指示した。特に、社会貢献度については、CSR（企業の社会的責任）の説明を行うとともに、後に「模擬投資」を行う際の重要な判断材料になることを確認した。

次に、約 40 名の生徒を８～９のグループに分け、グループごとに新たなビジネスプランを企画させた。その際、企業理念、ターゲットとニーズ、商品企画、価格、広告、CSR など、多様な論点を盛り込んだワークシート（資料１）を作成し、それぞれについて検討させた。特に、社会的な望ましさという視点を重視し、企業理念や CSR を考察させる際には企業のホームページ等を調べさせ、「環境」や「人権」、「安全」や「安心」といったキーワードを基にどのような社会貢献活動が行われているかを確認させた。

第三次におけるプレゼンテーションに際しては、ワークシート（資料２）を用いて生徒同士で相互評価させるとともに、質疑応答の時間を設けた。また、全てのグループのプレゼンテーションが終了した後、各自が最も魅力的だと思った企業のプレゼンテーションシートに計 200 万円分の「投資シール」を貼るという形で「模擬投資」を行わせた。単元の締め括りには、自己評価シートに取り組ませ、各自の学習活動を振り返らせた。

(6) 単元の振り返り

ア　仮説の検証

まず、グループワークを観察したところ、生徒は活発に意見を出し合い、外国人にとって魅力のあるビジネスプランについて、様々な側面・角度から考察している様子が確認できた。また、多くの生徒が、調べたり考えたりしたことをワークシート（資料１）の各欄に詳述しており、多様な論点について深く探究した成果が見て取れた。さらに、自己評価シートの自由記述の欄には、「実際に外国人の話を聞くことで、日本のことについて新たな発見があった」などの感想が多く見られた。これらの結果から、言語活動やワークシートの工夫を図ることで、多面的・多角的に考察する力を高めることができたと言える。

次に、プレゼンテーションの際に使用したワークシート（資料２）の記述からは、社会的に望ましい企業の在り方について、「独創性」や「価値性」などの様々な視点や考え方を踏まえて公正に判断しようとした様子を読み取ることができた。特に、「投資しようと考えた理由」の欄には、CSR の内容を評価したという旨の記述が多く見られた。こうした結果から、社会的な望ましさという視点を反映した評価規準を設定し、それを明示して言語活動を行わせることは、公正な判断力の育成に一定の効果があると言える。

最後に、単元のまとめとして、各自の取組や理解度を自己評価シートに記入させたところ、下の表のような回答を得ることができた。

表中の評価項目５の数値を見ると、Ａ（できた）又はＢ（まあまあできた）と回答した生徒の合計は95%にのぼる。この結果から、様々な論点を盛り込んだ言語活動や多様な学習評価によって、生徒自身も多面的・多角的に考察することができたと感じていることが分かる。また、評価項目６の数値を見ると、Ａ（できた）又はＢ（まあまあできた）と回答した生徒の合計は、やはり 90%以上にのぼる。この結果は、社会貢献度などに関する評価規準を明示した上で言語活動を行わせたことで、社会全体の幸福に配慮した公正な判断力の育成につながったということを示している。

表　自己評価の結果

評 価 項 目	A	B	C	D	合計
1　映像を観たりグループワークを行ったりすることで、会社の目的や役割について、より深く知ることができた。	144 人	94 人	1 人	0 人	239 人
	60%	39%	0%	0%	100%
2　映像を観たりグループワークを行ったりすることで、株式会社の仕組みや投資の意義について、より深く知ることができた。	128 人	107 人	4 人	0 人	239 人
	54%	45%	2%	0%	100%
3　映像を観たりグループワークを行ったりすることで、新たなビジネスプランの企画という課題について、より積極的に考えようとすることができた。	136 人	90 人	13 人	0 人	239 人
	57%	38%	5%	0%	100%
4　新たなビジネスプランの企画という課題を通して、仕事をする上で大切なことを考えたり、将来の自分の仕事について考えたりすることができた。	135 人	77 人	25 人	2 人	239 人
	56%	32%	10%	1%	100%
5　企業理念、商品企画、価格、広告、CSR などについて意見を出し合ったり、発表をお互いに評価したりすることで、会社の事業を様々な側面・角度から考えることができた。	161 人	67 人	11 人	0 人	239 人
	67%	28%	5%	0%	100%
6　価値性、独創性、社会貢献度などの評価ポイントを踏まえてグループワークを行うことで、社会的に望ましい会社の在り方について考えることができた。	127 人	99 人	12 人	1 人	239 人
	53%	41%	5%	0%	100%

※評価について（Ａ：できた、Ｂ：まあまあできた、Ｃ：あまりできなかった、Ｄ：できなかった）。
※ＡＢＣＤの各割合は、小数点以下を四捨五入しているため 100%にならないことがある。

イ　今後の課題

本事例の課題として、思考力・判断力に比べて、表現力の伸長が不十分だった点が挙げられる。実際、課題への取組を通じて、優れたビジネスプランを着想していても、プレゼンテーションの能力が乏しいために低い評価となったグループがいくつか見られた。思考・判断の過程や結果を、適切に表現する力を身に付けさせるためには、指導方法を更に工夫改善していく必要がある。

また、今回の取組では、「社会貢献活動を行っている企業であれば、無条件で社会的に望ましい」といった、安易な考えをもつ生徒も見受けられた。現実の経済社会においては、社会貢献よりも外部からの評価を得ることを主目的に CSR を行っている企業も存在し得る。そのような負の側面も踏まえながら、社会的な望ましさについて深く考えさせるプロセスを欠いていたのではないかという課題を残した。

(7) 検証授業で使用した教材

資料１　多面的・多角的な考察を促すためのワークシート

「株式会社をつくろう！」ワークシート⑤

■ 課題：外国人向けの魅力あるビジネスプランを企画し、
より多くの投資家から資金を調達しよう！！

会社名　※前か後ろに株式会社をつける	業種　※ﾜｰｸﾌﾞｯｸP.6～7 参照

社長	ﾏｰｹﾃｨﾝｸﾞ	商品企画	CSR	財務・広告

企業理念　※会社が実現したい大きな目標を書こう

ターゲットとニーズ　※できるだけ具体的に書こう（性別は？ 年齢は？ どんなニーズを持っている？）

商品・サービスの名称と内容	CSR（社会貢献活動）

価格	キャッチコピー（PR ポイント）　※他の商品との違いを際立たせよう

3年　　組　　番　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

資料２　公正な判断を促すためのワークシート

「株式会社をつくろう！」ワークシート⑦

■ 課題：お互いのプレゼンテーションを聞いて、魅力的だと思う会社に投資しよう！！

≪評価のポイント≫
① 分析力：具体的なターゲットを想定し、そのニーズに応じたビジネスプランを企画しているか。
② 独創性：すでに存在する商品にはなかった、新しいアイデアを盛り込んだ商品になっているか。
③ 価値性：単なる思いつきのアイデアではなく、本当に顧客が買いたくなるような魅力があるか。
④ 社会貢献度：単に利益を追求するのではなく、社会にとって望ましい活動を提案できているか。
⑤ プレゼン力：限られた時間を有効に活用して、相手に分かりやすく伝える工夫がされているか。

会社名	分析力	独創性	価値性	社会貢献度	プレゼン力	総合評価

※それぞれの項目をA～Dで評価しよう

投資する会社①	投資しようと考えた理由（どんな点が良かったのか）
投資する金額　　万円	

投資する会社②	投資しようと考えた理由（どんな点が良かったのか）
投資する金額　　万円	

3年　　組　　番　氏名＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿＿

３　実践事例Ⅱ

科目名	倫理	学年	第２学年

(1) 単元名、使用教材

・　単元名　　(3) 現代と倫理

　　ア　現代に生きる人間の倫理

・　使用教材　『倫理』（東京書籍）

(2) 単元の指導目標

・　「社会と個人」や「法と道徳」といった倫理的諸課題について考察させ、よりよい国家や社会を形成しようとする実践的意欲を高めさせる。

・　現代の倫理的諸課題について多面的・多角的に考察させ、その解決策の是非を公正に判断させ、その過程や結果を適切に表現させる。

・　倫理的諸課題に関する資料を収集し、課題の解決に役立つ情報を適切に選択して、効果的に活用させる。

・　ヘーゲルの絶対精神に基づく歴史観や弁証法の原理について理解し、その知識を身に付けさせる。

(3) 単元の評価規準

ア　関心・意欲・態度	イ　思考・判断・表現	ウ　資料活用の技能	エ　知識・理解
「社会と個人」や「法と道徳」といった倫理的諸課題について考察し、よりよい国家・社会を形成しようとする実践的意欲を高めている。	現代の倫理的諸課題について多面的･多角的に考察し、その解決策の是非を公正に判断し、その過程や結果を適切に表現している。	倫理的諸課題に関する資料を収集し、課題の解決に役立つ情報を適切に選択して､効果的に活用している。	ヘーゲルの絶対精神に基づく歴史観や弁証法の原理について理解し、その知識を身に付けている。

(4) 単元の指導と評価の計画（２時間扱い）

次程	ねらい・学習活動等	評価の観点				評価規準（評価方法）
		関	思	技	知	
第一次（1時間扱い）（本時）	【ねらい】ヘーゲルの歴史観や弁証法の原理を理解させるとともに、弁証法的な方法を用いて、倫理的諸課題を多面的・多角的に考察させる。					
	○ヘーゲルの歴史観や弁証法の考え方について理解する。				●	○「世界の歴史は理性的に進行する」、「弁証法」、「絶対精神」等、ヘーゲルが説いた言葉の意味を理解している。（発言・考査）
	○「正－反－合」の弁証法的な考え方を活用して、社会的事象を多面的・多角的に捉えられるようになるためのワークを行う。		●			○弁証法的な考え方を用いて、社会的事象を多面的･多角的に捉えている。（ワークシート）
	○社会的課題の解決のためには、様々な立場を踏まえる必要があることを理解する。			●		○様々な立場を考慮に入れた上で、自己の意見を述べている。（ワークシート）

第二次（1時間扱い）	【ねらい】ヘーゲルによるカント批判を理解させるとともに、法的自由と道徳的自由を対置させることで、よりよい国家・社会の形成者としての態度を養う。					
	○カントからヘーゲルに至る思想の流れを時代背景とともに理解する。	●				○思想の大きな流れに対して関心をもち、「法と道徳」の対立の背景にあるものを多面的・多角的に考察しようとしている。（観察）
	○ヘーゲルがカントを評価した点と批判した点を整理するとともに、ヘーゲルの説いた人倫の考え方を理解する。			●		○提示される事例を弁証法の枠組みに即してとらえられる。（発表）
	○第一次・第二次で学んだ用語を体系的に再確認する。				●	○ヘーゲルの絶対精神に基づく歴史観や弁証法の原理を、用語とともに正しく理解している。（ワークシート）

(5) 本時（全２時間中の１時間目）

ア　本時の目標

・　ヘーゲルの絶対精神に基づく歴史観や弁証法の原理について理解させ、その知識を身に付けさせる。

・　倫理的諸課題について、弁証法的な方法を用いて多面的・多角的に考察させ、その解決策の是非を公正に判断させ、その過程や結果を適切に表現させる。

イ　本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
導入	5分	○既習事項を確認するとともに、ヘーゲルの歴史観について知り、弁証法の考え方を身に付けることが本時のポイントであることを理解する。	○本時の目標が「多面的・多角的に考察する力」を身に付けることだと明示した上で、ヘーゲルの「世界の歴史は理性的に進行する」という言葉の意味を考えさせる。	ア　観察
展開	40分	○「弁証法」「絶対精神」という言葉の意味を理解する。	○理解が十分でない生徒には、個別に資料集を参照するよう、机間指導する。	エ　発言
		○様々な社会的事象について、弁証法の考え方を適用して考察を深めるとともに、ワークシートに自分の考えを記入する。	○弁証法による思考法について、身近な具体的事例を用いて説明する。	イ　ワークシート
		○社会のルールは、対立する複数の考えを止揚した結果、形成されているということを理解する。	○ルールづくりには「原則」と両立させられないものを、「例外」として設けることが必要なのだと理解させる。	ア　観察
		○「正－反－合」の弁証法的な思考の活用について、具体的事例を基にその意義を考察する。	○よりよいルールづくりには、自分とは異なる立場、自分に対しての「反」の立場をおもんぱかることが大切であることを理解させる。	イ　ワークシート
まとめ	5分	○社会的課題の解決のためには、それに関わる様々な立場の人、その課題のもつ様々な面を考慮に入れる必要があることを理解する。	○道徳的には同情されるが法律では許されない「嘱託殺人」や、法律では認められているが倫理的に議論がある「死刑制度」について触れ、第二次の導入とする。	イ　ワークシート

(6) 単元の振り返り

ア　仮説の検証

(ｱ) 多面的・多角的に考察する力について

本時においては、弁証法の原理を理解し活用することが、多面的・多角的に考察する力を培うことにつながるという認識の下、広く社会のルールについて深く考察させる場面を設け、ワークシート等を活用した言語活動を行わせた。本事例が多面的・多角的に考察する力を培うことに資するものであったかどうかを確認するため、弁証法の原理を活用した次の問いと評価規準を用いて検証作業を行った。結果を集計した各評価ごとの生徒の人数及び割合は、下の表のとおりであった。

【問い】
①正：Ａ校生の放課後の活動は午後５時までとする。
②反：（　　）
（　　）
（　　）
③合：生徒手帳 16P の２（２）
⇒放課後の活動は午後５時までに下校できるように終了すること。やむを得ず延長する場合は６時までとする。ただし６時とは校門を出る時刻である。

【評価規準】
Ａ　やむを得ないない理由で５時以降も残らざるを得ない生徒の立場、６時を活動終了時刻と捉え活動後も遅くまで残ろうとする生徒の立場、両方を慮っている。
Ｂ　やむを得ないない理由で５時以降も残らざるを得ない生徒の立場、６時を活動終了時刻と捉え活動後も遅くまで残ろうとする生徒の立場、一方を慮っている。
Ｃ　上記Ａ、Ｂいずれにも当てはまらない。

表　各評価ごとの生徒の人数及び割合

	Ａ評価	Ｂ評価	Ｃ評価	合計
生徒の人数（人）	27 名	7 名	4 名	38 名
生徒の割合（%）	71.1%	18.4%	10.5%	100%

弁証法の原理を理解することが多面的・多角的に考察する力を培うことに繋がることを検証する上で、上記データ中のＡ評価の生徒が占める 71.1%という割合は、有意に高いと考えられる。

また、Ｃ評価を受けた４名の生徒に対して、生徒同士で相互評価をさせる等の指導を行った結果、次の問いに対して以下のような解答が得られた。

【問い】
「次世代のリーダーとして、ルールづくりの際に心がけるべきことを考えてください。」

【生徒の解答】
○　様々な角度から、そのルールがたくさんの人に理解されるものか考え直す。正があったら反が必ず出てくるから、いろんな面を考える。
○　多くの困る人と困らせる人を予測してルールをつくること。そのルールに皆が納得すること。
○　多くの場合でも対応できる柔軟なものにすること。
○　例外は生まれないか、またその例外の影響力はどれほどかの考察。

先の問いでＣ評価を受けた生徒が、指導後に、本問に対する解答では「例外」「様々な角度」「いろんな面」「困る人」といった多面的・多角的な視点に基づく配慮ができるようになっている。これは、生徒同士の相互評価をはじめとする、多面的・多角的な考察を促すための指導の結果であると考えられる。

(ｲ) 公正に判断する力について

本単元の第二次では、次の三段階の評価規準を明示した上で、「法と道徳」が両立しない場合にどのように公正な判断を下すか、具体例（嘱託殺人を犯した者に対する罰の妥当性、死刑制度の是非）を挙げて言語活動を行わせた。結果的に、大半の生徒が評価規準を意識しながら、倫理的課題の背景にある対立構造を踏まえながら、社会全体の幸福という視点を加味した解答を積極的に記述するようになった。

【評価規準】

Ａ　社会全体の幸福に配慮し意見を表現することができる。(論点整理やグループワークを通じて、自分の意見・自分とは反対の立場の意見を社会にとっての望ましさの観点で吟味し、自分とは反対の立場を自分の立場と両立させようと試みている)

Ｂ　自分とは反対の立場を踏まえて意見を表現することができる。（論点整理やグループワークを通じて、自分の意見が反対意見よりも正しい主張であることを論理的に説明できているが、その正しさの背景に社会的な望ましさや反対の立場に対する配慮が見られない）

Ｃ　自分の意見を一定の根拠を基に表現することができる。（自分の意見を一定の根拠をもとに表現することができているが、それが一面的であり、社会的な望ましさの観点や自分とは反対の立場の人に対する配慮が見られない）

（注）カッコ内の記述は、口頭で教員が補足的に説明した内容である。

【Ａ評価の生徒の記述例①】

・　殺人に至るまでの事情は察せられるべき。介護に疲れ果て母を殺(あや)めた青年、殺人を犯さざるを得ない状況に追い込んだ原因は社会全体にもあり、彼を断罪するだけでは済まされないはずだ。しかし一方で社会が殺人を容認することもあってはならない。社会にとって望ましいのは、人の命の尊厳を訴えながらも、原則論で全てを片付けることなく個々人の事情を察する姿勢があることだ。［嘱託殺人を犯した者に対する罰の妥当性］

【Ａ評価の生徒の記述例②】

・　法律を守る行為はなされるべきだが、その行為が孔子の「仁」なき「礼」のように、形式的になってはならない。行為者の心の在り方も大切であり、行為と心の二つを両立させる仕組みづくりに取り組むことが社会に生きる我々には求められている。［嘱託殺人を犯した者に対する罰の妥当性］

・・

【Ｂ評価の生徒の記述例】

・　死刑制度には賛成である。殺人を許容する社会はあってはならないが、それ以上に被害者の心情を察した罰が下るべきだからである。［死刑制度の是非］

【Ｃ評価の生徒の記述例】

・　死刑には反対である。なぜなら、人を殺す行為は絶対的に許されないものだからである。［死刑制度の是非］

イ　今後の課題

検証の結果から、自分とは異なる様々な立場をおもんぱかることが重要であることを促すワークへの取組、生徒同士の相互評価の実施などにより、多面的・多角的に考察することがよりよい社会の実現には必要であるという認識を多くの生徒がもつに至ったことは大きな収穫であったと言える。個々の生徒のワークシートの記述から、自分と異なる意見を尊重し、互いの意見を一層高めていこうという姿勢をもつことが、社会の合意形成を実現する上で極めて重要なことであると気付かせるきっかけになったことも明らかになった。

このように、多面的・多角的に考察する力の育成については、概ね考えていたとおりの成果が得られたが、公正に判断する力については、ワークシートに「社会全体のことを考えて」、「多くの人の幸福を実現するために」等の記述があっても、社会的な望ましさについて十分には言及できていない生徒もおり、明示された評価規準の意図が十分に伝わっていない様子が観察できた。本校の生徒は、日頃から各教科で論述式の問題に取り組ませていることもあり、表現力についても一定以上の力量を備えた生徒が多いのだが、本事例を通じて、公正な判断力を培うための指導とその評価については、社会的意義を考えさせるプロセスを重視して取り組ませるなど、今後改めて工夫・改善の余地があることが明示された。

(7) 検証授業で使用した教材

資料１　多面的・多角的な考察を促すためのワークシート

倫理　弁証法プリント

Ⅰ．弁証法的な方法を用いて、事象を「理性的に遂行」させよう！

③合

止揚：否定しつつ保存する

①正　両立しない　②反

例
①正：牛丼
②反：カレー
③合：カレー牛

問１
①正：子ども
②反：大人
③合：（　　）

問２
①正：ある
②反：ない
③合：（　　）

問３
①正：（　　）
②反：（　　）
③合：この芝生の上でペットを連れて歩いてはいけません。

≪各設問の解答例≫
問１：青年
問２：なる
問３：
①この芝生は自由に立ち入ることができます。
②ペットが芝生にいる人に迷惑をかけてはいけません。

問４
①正：この芝生の上でペットを連れて歩いてはいけません。
②反：野良犬を連れてきて、この芝生に放してはいけません。
③合：（　　）

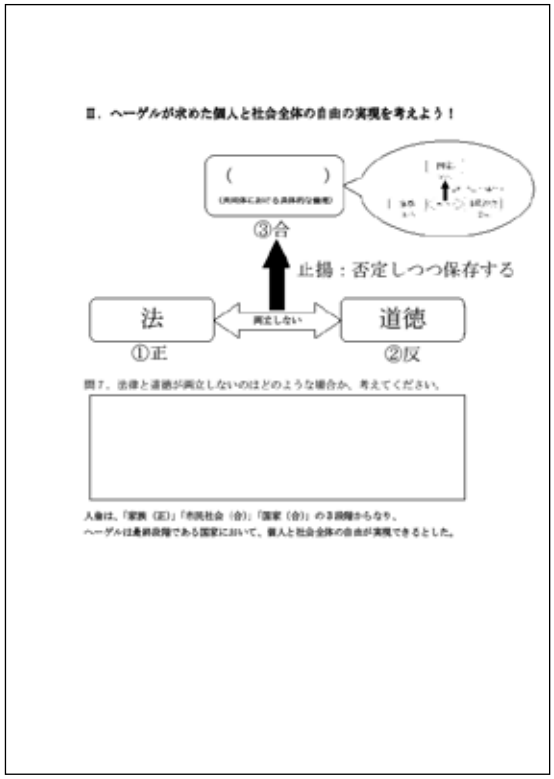
問５
①正：動物をこの芝生の上に存在させてはいけません。
②反：人間はこの芝生に入っても構いません。
③合：（　　）

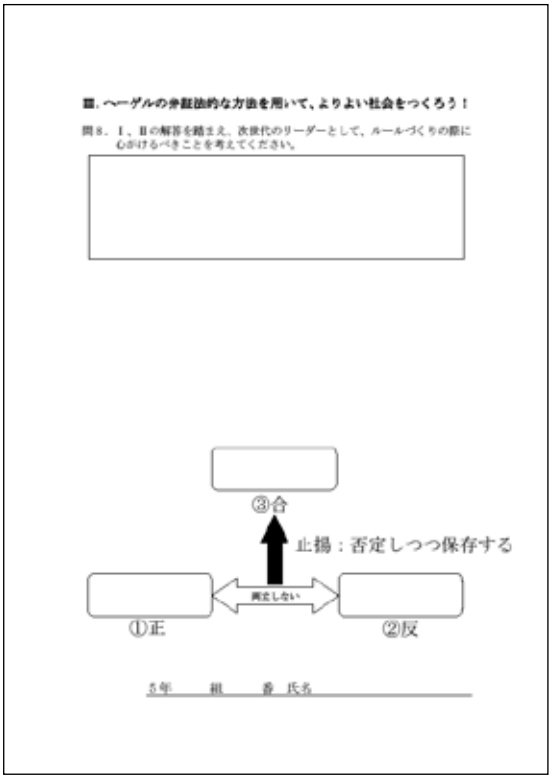
問６
①正：Ａ高生の放課後の活動は午後５時までとする。
②反：（　　）
（　　）
（　　）
（　　）
③合：生徒手帳１６Ｐの２（２）
⇒放課後の活動は午後５時までに下校できるように終了すること。やむを得ず延長する場合は６時までとする。ただし６時とは校門を出る時刻である。

問６
問６②の（　　）に書いた解答を隣の生徒と確認しあい、そのうえで、
自分だけが書いていた解答には赤丸を、
相手の生徒だけが書いていた解答は下に書きましょう。

≪各設問の解答例≫
問４：動物をこの芝生の上に存在させてはいけません。
問５：動物をこの芝生の上に存在させてはいけません。ただし人間は除く。

資料２　公正な判断を促すためのワークシート





4　実践事例Ⅲ

科目名	政治・経済	学年	第３学年

(1) 単元名、使用教材

・　単元名　　(1) 現代の政治

　　ア　民主政治の基本原理と日本国憲法

・　使用教材　『政治・経済』（第一学習社）

(2) 単元の指導目標

・　現代日本の選挙制度に対する関心を高め、若者の投票率の低下について意欲的に探究させ、望ましい解決の在り方を客観的に考察させる。

・　現代日本の選挙制度について、国民の代表を選出するという視点から多面的・多角的に考察させ、様々な立場、考え方を踏まえて公正に判断させ、その過程や結果を適切に表現させる。

・　若者の投票率の低下等について、グラフの読み取りを通して理解させ、望ましい解決の在り方への手立てとして効果的に活用させる。

・　現代日本の選挙制度、投票率、世界の選挙との比較などについて、基本的な事柄を理解させ、その知識を身に付けさせる。

(3) 単元の評価規準

ア　関心・意欲・態度	イ　思考・判断・表現	ウ　資料活用の技能	エ　知識・理解
現代日本の選挙制度に対する関心を高め、若者の投票率の低下について意欲的に探究し、望ましい解決の在り方について客観的に考察しようとしている。	現代日本の選挙制度について、国民の代表を選出するという視点から多面的・多角的に考察し、様々な立場、考え方を踏まえ公正に判断し、その過程や結果を適切に表現している。	若者の投票率の低下等について、グラフの読み取りを通して理解し、望ましい解決の在り方への手立てとして効果的に活用している。	現代日本の選挙制度、投票率、世界の選挙との比較などについて、基本的な事柄を理解し、その知識を身に付けている。

(4) 単元の指導と評価の計画（２時間扱い）

次程	ねらい・学習活動等	評価の観点				評価規準（評価方法）
		関	思	技	知	
第一次（1時間扱い）	【ねらい】若者の政治に対する意識の希薄さが投票率の低下の要因となっていることを理解させる。また、選挙制度の歴史を通して選挙の原則を理解し、選挙権の年齢について考察させる。					
	○若者の選挙や政治に対する意識についてグラフを読み取り、自己の意見をワークシートに記入する。		●			○若者の政治に対する意識について、グラフの読み取りを通して現状を理解し、選挙に対する自己の意見を述べている。（観察・ワークシート）
	○選挙制度の歴史的変遷を通して、選挙の原則について理解し、望ましい選挙権年齢について考察し、発表する。				●	○選挙制度について理解し、望ましい選挙権年齢について、理由を踏まえて自己の意見を述べている。（ワークシート・発表）

第二次（1時間扱い）（本時）	【ねらい】様々な立場の人の投票行動を確認し、選挙の意義について考察する。また、世界の投票率や義務投票なども踏まえ、社会を良くするための政治参加の在り方について考察させる。					
	○若者と高齢者の投票行動を対比するとともに、各政党の政策の違い等を踏まえながら、選挙の意義について考察する。			●		○選挙に行かない理由や選挙に行く理由等をグラフや資料から読み取り、選挙の意義について考察している。（ワークシート・発表）
	○世界の主要国の投票率や義務投票との関連について理解する。		●			○義務投票のメリット・デメリットについて、政治参加という視点から自己の意見を述べている。（ワークシート・発表）
	○日本の選挙制度や日本人の政治参加の在り方について考察する。		●			○多面的・多角的な視点から政治参加について考察し、意見を述べている。（ワークシート・発表）

(5) 本時（全２時間中の２時間目）

ア　本時の目標

- 有権者の投票行動を事例として、選挙の意義について考察させる。
- 投票率について様々な視点から考察することで、多面的・多角的な視点を養う。

イ　本時の展開

過程	時間	学習内容・学習活動	指導上の留意点	評価規準・評価方法
導入	5分	○前時の選挙制度の学習について振り返る。 ○自分が選挙権をもつ立場であると想定して、その場合の投票行動について考える。	○前時の既習事項を振り返らせる ○政治の知識はどういう場で得ることができるのか、もう一度考察させる。	ア　観察 エ　発言
展開	35分	○棄権理由を提示し、投票しない（行かない）人、投票する（行く）人について考える。 ○投票率を上げるための方策について考える。また、投票率が高い場合のメリットについても考える。 ○各党のマニフェストについて、具体的にどのような政策を提言しているのかを確認する。 ○特に福祉政策について、どのようなことが争点となっているかについて確認する。 ○グラフから世界各国の投票率を比較して、投票率の高い国について着目し、日本の現状と比較する。 ○投票を義務化するという考え方の是非について考える。	○表の読み取りをさせるとともに、その背景についても考えさせるように指導する。 ○投票に行く人（主に高齢者）について目的等も考察させる。 ○各政党のマニフェストを提示し、それぞれの分野でどのような政策を提言しているかを考察させる。 ○医療負担に関するチラシを提示し、高齢者優遇の政策になっていることに気付かせる。 ○投票率が高いとどんな所でメリットとなるか考察させる。 ○世界で投票を義務化している国、投票しない人に罰則のある国を紹介し、義務化についてメリット・デメリットを考察させる。	ウ　読み取り イ　発言、ワークシート ウ　読み取り イ　発言 イ　ワークシート イ　ワークシート

		○投票率を上げる必要があるのかどうか､選挙の意義という観点から考える。	○今までの学習事項(各党の政策や投票の義務化など）を踏まえ、選挙の意義について考察させる。	エ　観察
まとめ	１０分	○よりよい政治参加としての選挙の在り方について考える。	○評価規準を生徒に提示し、多面的･多角的に考察するという視点に立って自己の意見を書けるようにする。	イ　ワークシート

(6) 単元の振り返り

ア　仮説の検証

今年度の本校における政治・経済の授業は、生徒５名の自由選択科目であった。どの生徒も、社会的事象への関心が高く、政治・経済を積極的に学びたいという意欲をもって授業に臨んでおり、少人数授業の利点を生かして仮説の検証を行うことができた。

この授業では、年間を通して、ワークシートだけでなく、発問を通じた対話形式の指導を重視するなどして、生徒に多面的・多角的な考察を促す工夫を行った。また、少人数であることの利点を活かし、互いの意見を黒板に記述させ、他の生徒の意見にコメントを加えさせたりして言語活動の充実を図り、考察を深めさせた。授業内のアンケートや１学期の言語活動と本時の言語活動を比較・検討したところ、次のような結果を得た。なお、１学期は数回の授業ごとにテーマ学習を行っており、授業の最後には今回同様に生徒の意見を聞く問いを出題していた。

(ｱ) 多面的・多角的に考察する力について

本時の観察やワークシートの記述内容を分析した結果、医療・年金問題や少子化の進展といった現代社会の諸課題について、若者や高齢者など複数の年齢層の視点に立って考察させることで、これらの問題を多面的・多角的に考察する力が身に付いたことを確認できた。また、授業後、生徒にアンケートを実施し、得られた自己評価の集計結果を示したものが次の表である。

表　自己評価の結果

質 問 項 目	1	2	3	4	5
この授業で多面的・多角的に（様々な視点や角度で）選挙について考えることができたか。	１名	４名	０名	０名	０名

※ １：とてもできた　２：できた　３：普通　４：できなかった　５：全くできなかった

上記の結果からも、ワークシートに沿って、複数の異なる立場の視点に立って考察を行うことで、多面的・多角的に考察できたと、生徒自身も考えていることが分かる。

また、次の記述内容は、１学期の言語活動における記述と、本時の言語活動における記述とを比較したものである。

【生徒Ａ】
■１学期の言語活動（社会保障について）
・　高齢者になったら働けないから社会保障はあった方がいいと思う。
■本時の言語活動（選挙について）
・　選挙に興味のない若者に対して、学校等の教育現場を活用して政治についての議論する機会を設け、政治についてもっと関心をもてるようにする。また若者でもめんどくさいや興味がない人も多いので、テレビのリモコンやネットでの投票など、時間がない人に対しても投票できる機会を増やすことが大切である。お年寄りや体の不自由な人も投票できるようになるので、投票率の上昇につながる。

【生徒Ｂ】
■１学期の言語活動（社会保障について）
・　とてもいいもの！年金が返ってくるならやるべきです。
■本時の言語活動（選挙について）
・　若者が投票に行かないのは政治が遠い存在であるため、もっと政治のことを学ぶべきだと思った。それなので、義務教育である中学校から授業に政治を取り入れることで、興味のない人でも理解し、参加すると思う。ネットで投票できるようにすればいいと思う。

他の生徒についても、単純な意見の表明から、いくつかの異なる視点に立った意見を記述できるようになったという結果が得られた。このことから、ワークシートや発問の工夫などによって、生徒の多面的・多角的な考察を促すことができたと言える。

(ｲ) 公正に判断する力について

本単元では次のような評価規準を設定し、ICT を活用してあらかじめ生徒に明示した上で、課題に取り組ませた。また、その際の生徒の記述例は以下のとおりであった。

【評価規準】
A　社会全体に配慮した自分の意見を述べている。（ワークシートの様々な視点について理解し、それらを踏まえた上で、社会全体の幸福に配慮した意見を表現できている）
B　反対意見などの視点を踏まえて自分の意見を述べている。(ワークシートの様々な視点の中で、一部を取り上げ、自分の意見を表現できている)
C　自分の意見を述べている。（自分の意見を表現できている）
（注）カッコ内の記述は、口頭で教員が補足的に説明した内容である。

【Ａ評価の生徒の記述例】
・　社会的に意味のある投票なので、面倒だから行かない人を投票させても意味のない投票になる可能性が高い。それならば、アンケートやテストを実施し、政治に熱意や興味のある人を代表として投票するというのも一つの手であると考えた。ただこの方法は制限選挙であるため、反感をもつ人もいるかもしれない。それならば小学校や中学校の義務教育で仕組みではなく、政治に関心をもてるように学ばせる必要があると思う。
【Ｂ評価の生徒の記述例】
・　若者が投票に行かないのは政治が遠い存在であるため、もっと政治のことを学ぶべきだと思った。それなので、義務教育である中学校から授業に政治を取り入れることで、興味のない人でも理解し、参加すると思う。ネットで投票できるようにすればいいと思う。

生徒のワークシートの記述例からは、あらかじめ評価規準を明示した上で言語活動を行わせることで、学習意欲（ここでは自分の意見を積極的に記述すること）が高まるとともに、自分とは異なる意見や社会全体の幸福に配慮した解決策を意識して考えるようになったことが読み取れる。

また、ここでの取組に関してアンケートを行ったところ、次のような回答を得た。

表　本時の取組についてのアンケート結果

質 問 項 目	1	2	3	4	5
①評価規準をあらかじめ示したことで、自分のやる気にプラスの変化がありましたか。	１名	４名	０名	０名	０名
②評価規準をあらかじめ示したことで、その規準を意識して自分の意見を書けましたか。	１名	４名	０名	０名	０名

※①について　1：とてもあった　2：あった　3：分からない　4：なかった　5：まったくなかった
※②について　1：とても書けた　2：書けた　3：分からない　4：書けなかった 5：まったく書けなかった

アンケート結果及び次の表からも、あらかじめ評価規準を明示した上で課題（ワークシート）に取り組ませることで、学習への意欲が高まるとともに、意識して社会全体の幸福に配慮した解決策を考えようとするようになったことが一定程度読み取れる。

表　今回の評価方法

評 価 方 法	A	B	C	合計
生徒の自己評価	１名	４名	０名	５名
教員の評価	３名	２名	０名	５名

イ　今後の課題

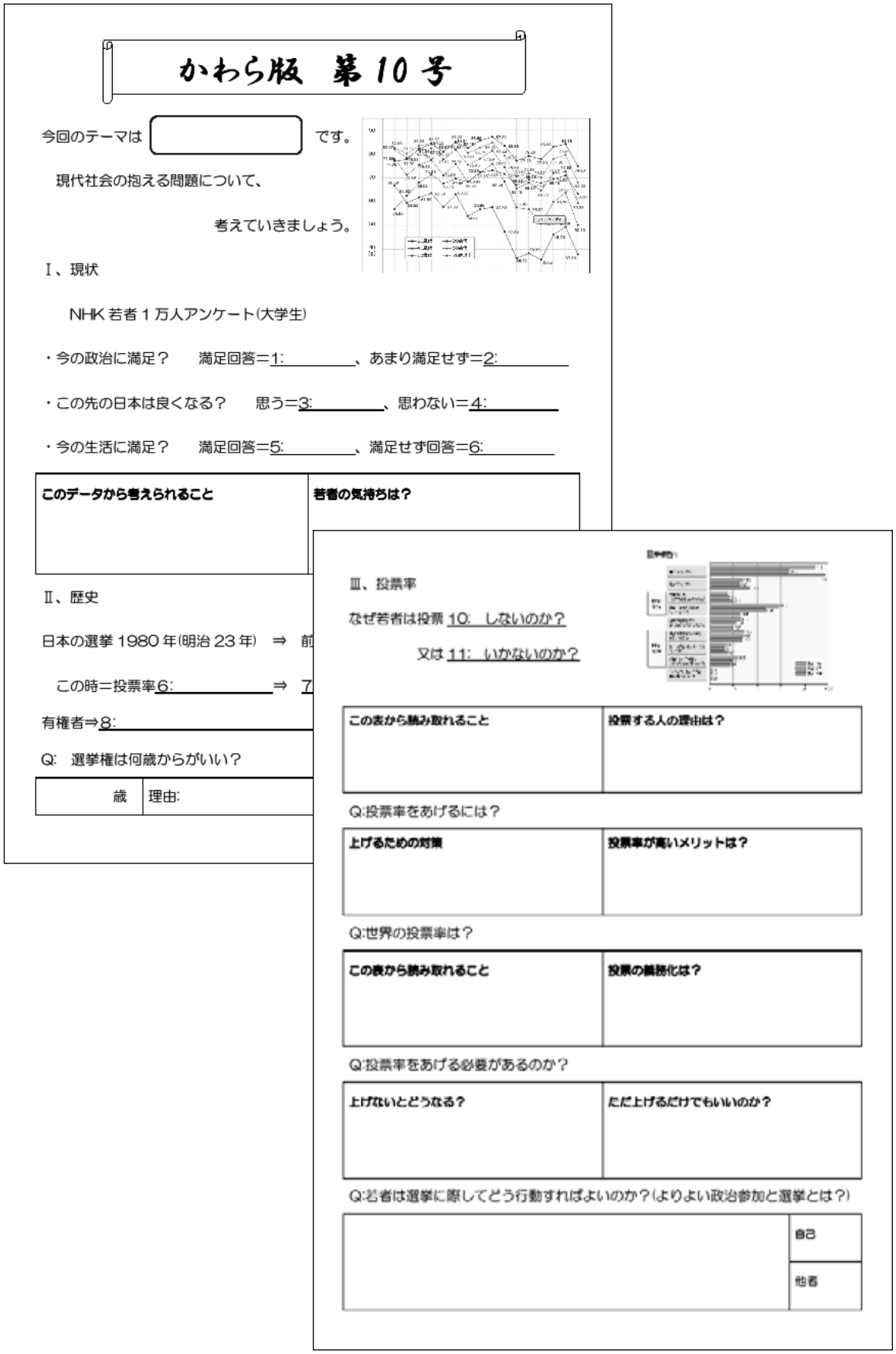
検証結果から、ワークシートの工夫を行い、日本において若者の投票率が低いという事実を基に、様々な論点・視点を教員が準備した上で生徒に意見を記述させることで、多面的・多角的な考察を促すことが可能になることが明らかになった。また、評価規準をあらかじめ明示し、評価に対する教員と生徒の認識の共有化を図ることは、生徒の学習意欲を喚起し、思考力・判断力・表現力等を向上させる上で有効であることが確認できた。

反面、教員が提示した様々な論点に対して、生徒はしっかりと考察するものの、生徒が自ら思考し新たな視点を身に付けるという点については不十分であった。これは受け身の授業という意識が未だに強いという別の課題でもある。

また、教員及び生徒の評価について分析すると、ワークシートに沿って多面的・多角的な考察がなされた後、自己の意見を表明するに当たり、社会全体の幸福について配慮できたかどうかという点については、生徒の自己評価が教員の評価よりも低いという結果が見られた。これについては、生徒の性格や自己肯定感の低さというものも要因として挙げられるが、評価規準についての理解が十分ではないと解することもできる。評価規準の明示については今後も継続的に実施し、教員と生徒の評価の共有を進めていくとともに、社会全体の幸福に配慮するとはどういうことなのか、社会的な公正についてどのように考えればよいのかなどについて、日頃の授業から意識的に考えさせていく必要がある。

(7) 検証授業で使用した教材

資料　多面的・多角的な考察を促すためのワークシート



かわら版　第10号

今回のテーマは　　です。

現代社会の抱える問題について、

考えていきましょう。

Ⅰ、現状

NHK 若者１万人アンケート(大学生)

・今の政治に満足？　満足回答＝1:　　、あまり満足せず＝2:

・この先の日本は良くなる？　思う＝3:　　、思わない＝4:

・今の生活に満足？　満足回答＝5:　　、満足せず回答＝6:

このデータから考えられること	若者の気持ちは？

Ⅱ、歴史

日本の選挙 1980 年(明治 23 年)　⇒　前

この時＝投票率6:　　⇒　7

有権者⇒8:

Q:　選挙権は何歳からがいい？

歳	理由:

Ⅲ、投票率

なぜ若者は投票 10:　しないのか？

又は 11:　いかないのか？

この表から読み取れること	投票する人の理由は？

Q:投票率をあげるには？

上げるための対策	投票率が高いメリットは？

Q:世界の投票率は？

この表から読み取れること	投票の義務化は？

Q:投票率をあげる必要があるのか？

上げないとどうなる？	ただ上げるだけでもいいのか？

Q:若者は選挙に際してどう行動すればよいのか？(よりよい政治参加と選挙とは？)

	自己
	他者

Ⅵ　研究の成果

本研究を進めていく中で、私たちは次のような仮説を立て、三者による実践事例を通じて仮説の検証作業を行った。

1　社会的事象を深く探究させる場面を設け、様々な論点・争点について言語活動を行わせるとともに多様な評価を行うことで、多面的・多角的に考察する力を育むことができる。
2　社会的な望ましさという視点を反映した評価規準を設定し、あらかじめ生徒に明示した上で言語活動を行わせることで、社会全体の幸福に配慮した公正な判断力を育むことができる。

まず、社会的事象を多面的・多角的に考察する力を育むために、ワークシート等を工夫して様々な論点や争点を明示し、多様な言語活動を行わせることで、現代社会の諸課題を多面的に考察させた。また、教員による評価に加え、生徒の自己評価、生徒同士の相互評価を取り入れることで、社会的事象を様々な角度から考察させた。このような言語活動を観察したり、ワークシート等を分析したりすることで、仮説１を検証した。

実践事例Ⅰでは、新たなビジネスプランを企画するという課題について、企業理念、ターゲットとニーズ、商品企画、価格、広告、CSR など、様々な側面から考察させた。また、実践事例Ⅱでは、弁証法の原理を理解させた上で、自分とは異なる様々な立場をおもんぱかることを促すワークに取り組ませた。実践事例Ⅲでは、選挙における若者の投票率の低下という問題を取り上げ、その背景にある現代社会の諸課題について、若者や高齢者など複数の視点から考察させた。

いずれの実践事例においても、ワークシート等の記述内容を教員が評価するだけでなく、生徒の自己評価や生徒同士の相互評価を取り入れた。その結果を分析したところ、ワークシートや言語活動の工夫改善を図ることで、多面的・多角的に考察する力の育成につながることが確認できた。

次に、社会全体の幸福に配慮した公正な判断力を育むために、評価規準を設定する際に、社会的に望ましい解決策を考察しているかどうかという視点を重視した。また、ワークシートや ICT 等を活用して、社会的な望ましさを加味することで高い評価が得られるということを生徒に明示し、評価規準について教員と生徒とが共通認識をした上で言語活動を行わせた。こうした言語活動を観察したり、ワークシート等を分析したりすることで、仮説２を検証した。

実践事例Ⅰでは、社会的に望ましい企業という視点を反映させた評価規準を設定し、プレゼンテーションの際にその観点から相互評価を行わせた。また、実践事例Ⅱでは、嘱託殺人や死刑制度の是非について、社会全体の幸福に配慮させながら公正に判断させた。さらに、実践事例Ⅲでは、投票率を上げるための方策について、「社会全体に配慮した意見を述べることができる」といった評価規準を明示した上で言語活動に取り組ませた。

このような言語活動の成果をワークシート等に記入させ、その結果を分析したところ、評価規準の工夫改善を図り、それを明示した上で言語活動を行わせることで、社会全体の幸福に配慮した公正な判断力の育成につながることが確認できた。

Ⅶ　今後の課題

これまで述べてきたように、本研究における指導と評価の工夫改善によって、思考力・判断力・表現力等を向上させる上で一定の成果を上げることができた。しかし、その一方で、次のような課題も残された。

まず、本研究では、多面的・多角的な考察を促すために、教員が幾つかの論点や争点を分かりやすく提示したり、ワークシートの中に複数の視点や要素を取り入れたりすることで、生徒が比較的容易に異なる立場や意見に気付くことを可能にしている。思考力・判断力・表現力等を高めるために、初期の段階ではこのような配慮も有効であろう。

しかし、最終的な到達目標としては、様々な社会的事象に対して、生徒自身が多面的・多角的な思考を働かせ、主体的に考察できるようになることである。その意味で、生徒の主体性をいかにして伸ばしていくのかという点が、本部会にとって今後の課題である。

次に、評価規準の設定や評価方法の工夫の点で改善の余地が残されたことも、課題の一つとして挙げられる。これまで、高等学校公民科の学習評価については、ペーパーテストに平常点を加味した、成績付けのための評価にとどまっている場合が多いとの指摘があった。言い換えれば、それは「知識・理解」の観点に偏った評価が行われているということである。

そこで、本研究においては、国立教育政策研究所教育課程研究センターが作成した『評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校公民科）』を活用し、評価規準の設定や評価方法の工夫について改善を図った。具体的には、社会的な望ましさという視点を評価規準に反映させ、それをあらかじめ生徒に明示した上で言語活動を行わせることで、社会全体の幸福に配慮した公正な判断力を育成しようと考えた。

その結果、各実践事例において、仮説の検証を裏付ける有意な結果を得ることができた。しかし、実践事例Ⅱで見られたように、「社会全体の幸福に配慮する」という評価規準について十分にその意図が浸透していないケースや、実践事例Ⅰで見られたように、CSR にのみ着目すれば企業活動の社会的な望ましさを考慮したことになると考えてしまうケースなど、幾つかの課題も浮き彫りになった。

このような課題を解決していくためには、そもそも社会的な望ましさとは何なのかという根源的な問いについて、考察を深めさせることが必要である。『現代社会』の冒頭で学習する「幸福、正義、公正」などの概念を繰り返し確認させながら、社会的な望ましさについての考えを深めさせるというプロセスが重要であることを改めて認識させられた。

また、ルーブリック的な評価規準を活用した取組は、定量的な知識・理解の習得には効果が高いとされてはいるが、本研究で設定した社会的な望ましさといった価値判断を伴うような課題に対しては、一定の留保を付ける必要があるとも考えられる。本研究では、ルーブリック的な評価規準の活用を優先したことで、生徒に対して社会的な望ましさを単純化して示すことになってしまった感もある。

以上のような課題意識を持ち続けながら、本部会では今後も指導と評価の更なる工夫改善に取り組んでいく。その結果については、来年度以降の研究報告を待たれたい。

平成２６年度　教育研究員名簿

高　等　学　校　・　公　民

学　校　名	課　程	職　名	氏　名
東京都立高島高等学校	全日制	教　　諭	◎ 大畑　方人
東京都立桜修館中等教育学校	全日制	教　　諭	○ 久世　哲也
東京都立足立東高等学校	全日制	教　　諭	林　　祐健

◎ 世話人　○ 副世話人

〔担当〕東京都教育庁指導部高等学校教育指導課
指導主事　山本 勇

平成２６年度
教育研究員研究報告書

高等学校・公民

東京都教育委員会印刷物登録
（平成２６年度第１８６号
平成２７年３月）

編集・発行　東京都教育庁指導部指導企画課
所　在　地　東京都新宿区西新宿二丁目８番１号
電話番号　（０３）５３２０－６８４９
印刷会社　正和商事株式会社

リサイクル適性Ⓐ
この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。